

巻頭言

手塚信吉

世界的に食糧危機が重大化している。冷害三年連続の凶作、異状干魃二億の飢民を擁している印度大陸、中部アフリカの干害は死者数百万人と伝えられる。その他の地域でも天候異変続出で、人知の及ばない不吉の臆測が流布されているが、何と言っても根本的には地球の上の土地と人口とのアンバランスが人類共存原理に反している。

故西独アデナワア首相は、自給食糧七〇%を独立国家の生命線と主張して、EEC小麦協定でも基本線を一步も譲らなかつた。日本でも明治以来、基本国策として、食料自給度は七五%以上を維持していた。十年長期戦争に耐え得たのはそのためであつた。

敗戦後の日本は、海外同胞総引揚げと、人口自然増とで昭和三十八年には一億人を突破した。そして、国民の食生活が、政治感覚を超越して、澱粉食から蛋白質に移行し、国民一人当りのカロリー摂取量が五〇%増となり、農業政策の立ち遅れから、食料自給率は低下

の一途を辿っている。

米に代つて主食化している、パンの原料小麦の九〇%、日本人の常食である。味噌、醤油、豆腐、納豆、豆麴等々の原料大豆の九〇%、家畜飼料の九〇%、砂糖、食塩の七〇%、牛豚羊肉類の四〇%等々輸入依存度は数増するばかりです。自給農産物は五〇%を割る始末である。

それも、農業保護政策によつて、漸く維持されている五〇%であつて、保護政策を放れば一日の存立も有り得ない日本農業である。

日本は原料輸入国であり、原油の輸入依存度は九五%、戦争を考えに入れなくとも、何かの事故で三週間も輸入が中絶すれば、日本工業は壊滅し、近代文化も綿花一朝の夢におわるであろうが、食料輸入が中絶したら国民の生命は危い。そんな独立国がどこにある。

人口一億一千万人の島国日本が、自給食料五〇%一日といえども安眠できる世界状況ではない。紙幣の胸算用に眩惑されて、国を挙

げて有頂天の日本の大人の世代は、ギロチン台にでも突き当らない限り、危機意識は感じないであろうが、時代感覚に目覚めた青年男女は、真剣に考える時であろう。

狭いながらも三十七万平方キロの日本国土、世界に稀な温暖多雨国で、農耕適地は一千万ヘクタール、これを有効最大限に二毛作三毛作と活用すれば、人口一億五千万人になつても、自給自足が不可能ではない。

だが既存農地六百万ヘクタールを、何千万分にも切りきざんだまま零細個人農家に分散私有せしめたままでは死地に等しい。

イスラエル国に学んで土地を国民有化して近代化農業に大転換すれば、たちまち問題は解決するであろうが、わずか十坪の地主でも反対するであろうから、票を気にする政治家に出来る仕事ではない。結局は、歴史と言ふ公平な力が裁断を下す時が遠くあるまい。

今日の諸問題



アキバ・エガー
訳 千葉幸広

労働生産性と賃金

最近、いろいろなグループによつて、数々のストライキが行われるようになりました。

イスラエルでも、港湾労働者のストライキ、航空機パイロットのストライキ、医師のストライキ、発電所の電子技師のストライキなどがありました。こういうストライキが何を意味するかおわかりでしょうか？ 国民経済はそれに対して高価な代償を払わなければなりません。これら独占的な立場にあるものは、多額の給与を受けているにもかかわらず、より多くのものを得ようとして、時には不正な方法をとるものです。このことが、時には、労働者のモラルと労働生産性を低下させ、国民経済を發展させる上において、大変危険なこととなります。

もし、すべてのことが試みられて、労働者と組合が、他に方法がないと判断するとストライキが行われますが、ストライキは、けつして労働者の用いる最初の武器であつてはなりません。ストライキを起こして要求が満足

されれば協定をするといったストライキによつて、正当な取り決めをすることは不可能です。

ほんとうに給与や労働条件の改善を必要とする人々は、イスラエルでは、ほとんどストライキを起こさず、ストライキを行う人達は上層階級の人達とか、高所得者達なのです。このことは、ストライキを武器として利用する場合の逆説です。特権をもつ人々が、より多くの特権を欲しがつて、完全雇用の状態においては、彼等と下層階級の人々との差を大きくし、より独占的な立場に立とうとします。

しかし、我々の労働運動は、差を拡げることではなく、差をせばめることでした。イスラエルでは、私的企業が四〇%をしめていますが、チョコレート工場を除いては、ストライキは全く起こりませんでした。ほとんどのストライキは、公的企業で起こされており、これは雇主が政府、あるいは自治都市で、すべての支出は国家予算によつてまかなわれて

います。もし、国家予算を増加しなければならなくなると税金を引上げねばなりません。

税率の引上げは、物価高を意味します。そうなれば、いったい、誰が上昇する物価を払うのでしょうか？ 主に、それは労働者なのです。そして、下層の労働者は、高所得の労働者よりも、より多くを支払わねばならないことになり。下層の労働者は、以前の収入の割合以上にパンとかバターのような生活必需品に対して、より多くを支払わなければならぬのです。高所得の労働者達にも、また同じようなことが言えますが、収入が多いので、それ程負担にはなりません。低所得階級の労働者達は、いつ、いかなる時も、高い間接税などすべての税金を払って

います。そのような状態を黙認せざるを得ないと言った人がいます。私達は、国家調停を持たねばなりません。国家調停とは、雇用主と労働者との間の争いを解決する力を国に与えるということです。政府が争いに對して強制的な調停を取り決めます。日本においては、私の知っているこのような状態は、動労や総評などの動きです。日本では、このようなことに對して、大きな不満をもっている人たちが

て、何がなされなければならないと考えていますし、政府は阻止しなければならぬと考えています。

イスラエルでは、それは共産主義者に扇動されたものではなく、公的立場を利用した、いくつかの労働者グループの搾取にすぎなかった。しかし、ヒスタドルトと政府は、強制的な調停には同意しませんでした。しかし、法律によって、グループや組合がストライキを行う場合には、その二週間前に労働省へ報告しなければならぬことを決めました。このことは、労働省の調停局に雇用主と労働者に調停会議にもって来る時間的余裕を与えており、多くの場合は成功していますが、そうでない場合もあります。もし、調停がうまくいかない場合は、労働者は自分達の代表を決め、雇用主側も彼等の代表を任命して、調停委員会のメンバーで、委員会によって任命された第三者の立会いのもとに話し合います。そして、この場合、第三者は労働者と雇用主の両者によって認められねばなりません。

一般に、その第三者は政府の役人ではなく、経済学者とか、社会学者といった人達なのです。この制度は、かなり多くのストライキとか、争いを避けるのに役立つています。

完全雇用、高い生産量、生産労働高利潤などの結果、この二年間に給与は最低三五%、最高四二%と上昇しました。しかし、通貨膨張により、この二年間に物価は二〇%上昇しています。昨一九七二年は一三・五%という大変な通貨膨張がありました。労働者の給与は上昇したといつても、三五%、四二%は名目上のものにすぎません。

昨年の給与の上昇は一七%でしたが、物価上昇が一三・五%ですから、実質的な給与上昇はごくわずかになります。なぜなら、その大部分はインフレーションによって差引かれるからです。

これは総合的な問題で、政府は増税せず、雇主は値上げせず、労働者は給与の賃上げを要求しないように、政府と雇用主と労働者の合体組織をつくり、この問題を解決しようとしてきました。二年半、このような取決めをしてきましたが、これは、いろいろな原因によって失敗に終わりました。その一つは、市場にかなりの購買力があり、値上げが行われたということ。人々は、どんなものでも、かなりの値段であっても買うだけの準備ができていて、これを、生産者が物価をつり上げるのに利用したのです。そしてまた、原料のコス

ト高や完全雇用もまた原因のひとつです。

これらの要素がインフレ傾向を押し進めました。イスラエルでは、大きなビルディングの建設や、膨大な軍事費が必要であります。これらすべてが、自然にインフレ傾向をささえることとなっています。私達が解決しようとしているこの問題は、生活費を補助するという形によっても試みられています。これはもし、物価が年三%以上上がった場合、自動的に生活賃金補助が、一年に一度支給されることになっています。しかし、一ヶ年に一三・五%も上昇した場合、今年は、五ヶ月間（五月の結果がわからないので四ヶ月間）七%も物価は上昇していき、これは去年と大体同じ割合ですが、ヒスタドルトでは、労働者は一ヶ年も待てないので、生活賃金補助を六ヶ月毎にするという修正案をまとめました。

去年の企業銀行の利益が、一五〇%から二〇〇%の間であることを考えるにつけ、なぜ労働者が国家経済発展のための犠牲を払わねばならないのか、と考へざるを得ません。少なくとも、去年一年で資本を二〇〇%も増やし、安易な利潤を得ている資本家の利潤を制限しなければなりません。ヒスタドルトと政府の間で、なぜ労働者だけが犠牲をしいられるのか、といった議論が続けられています。キプツのメンバーであり、ヒスタドルトの第二事務長であるベン・アロンの闘争は、非常に注目されています。彼は、政府と同じ労働政党に所属しながら、時々、はげしく政府と衝突します。そして、このことは、次の九月に行われるヒスタドルトの選挙においても、十一月の国会議員の選挙においても中心争点となる問題です。

目ざましいキプツ運動の発展

次に、協同ということについて、その発展と地域開発に関して、もう二、三述べようと思ひます。

なぜならば、我々は、ただ単なる労働組合主義者ではないからです。労働組合主義者の人々も、その事には興味を覚えられることで

労働経済の面において、イスラエルでは、最近の二、三年間、特にヒスタドルトに属する企業において目ざましい発展がありました。数年前は、ヒスタドルト傘下の企業は他の企業に比べて、利潤の割合においてその発展は遅れていました。しかし、最近は大がかりな管理方式の転換をはかり、若い優秀な人材を企業の管理面に参加させ、その結果、これらの企業は急速に発展し、今や私企業以上ではないにしても、それに匹敵するまでになっています。同様のことが、小売り、卸業面においても「マシユビル」というヒスタドルト下の大組織によって発展しつつあります。

もつとも顕著に発展している労働者の企業は、キプツの企業である、と私は思います。まず最初に、キプツは都市と離れた地域に建設されたものであることを述べなければなりません。そして、このような地域における産業といえは農業です。キプツは、大農方式による農場であつて、そこには、農業機械などの修理のための工場とか、大工や金属工の仕事場が必ずあります。そして、これらの手工業が、国家経済の一般的発展と共に大規模な

工業へと発展して行きました。

金属工の仕事場や、木工場が、電気工場やプラスチック工場のような世間並みの工場へと発展して行きました。最初はゆっくりでしたが、最近の三年間では急速に進歩しています。イスラエルには、二五〇のキブツがあつて、人口は約一〇万人、これらのキブツで既に二〇〇の工場を経営しています。すべてのキブツが工場をもっているわけではありませんが、現在、工場をもっていないキブツも、すべて工場をもつことを望んでいます。

しかし、工場をつくることは容易なことではありません。私のキブツのように、三つの工場をもっている所もあります。そのうち、ひとつはほんの二ヶ月前に開設されたもので船舶用の八〇トンもの大きなコンテナを生産しています。この工場は、アルミニウムのコンテナ製造方法を知っているアメリカの商社から五〇%の私的資本が入り、キブツ側は四〇%の資本を出し、残り一〇%は主な買手先であるイスラエルの海運会社「テム」からの投資です。このことは、注意すべきことながらです。イスラエルにおけるキブツ運動の歴史上、このように私企業から投資を受けるような関係は、初期にはまったく見られませんで

した。彼らがキブツを援助したがるのは、利潤追求以外の何ものでもありません。

もう一つの工場は、トレーラー、農業用機具、台所用品などを製造している金属工場で設備、管理ともによく行き届いております。

三番目の工場も、また大規模なもので、事務用の机、椅子、ロッカーなどを製造し、輸出しています。このように、一つのキブツが三つの工場を経営するのは、非常にまれなことです。また、キブツがあまり工場をもちすぎるのは好ましいことではありません。

私のキブツは、昨年までは二つの工場だけでしたが、一七五〇万イスラエルポンド（約一〇億五〇〇万円）以上の利益をあげています。一方、柑橘類からの収益、マンゴー、アボカドなど輸出用熱帯性果物、牛などの畜産、穀物、輸出入の花などを合わせたすべての農業生産高は、ただの三〇〇万イスラエルポンドに過ぎず、問題となっています。若者はあまり農業の仕事を好みません。このこともまた、キブツが工業を興す一つの理由なので

す。他方、都市から離れた地域に存在するキブツの発展の重要性は、農業と工業を労働者の村で一体化させたことにあります。即ち、収

府の資本、公的資本、銀行資本などを私のキブツが引きつける理由の一つです。なぜならキブツは産業投資の対象として、すぐれた組織であることが証明されたからです。

私は、このことは驚くべき結果だと考えています。私達は、キブツは農業には大変いいもので、農業だけが集約的共同労働をし得ると言つたものです。工業においては、管理者や、多くの技術者を必要とします。彼らは、普通の労働者よりも、はるかに高い給料を支払わなければならないでしょう。もし、そうでないならば、なぜ彼らは努力をしなければならないのか。そして、また、工業において、集約された共同経営労働はあり得ないだろうと考えていました。

しかし現在、キブツ企業の管理能力は、少

モシヤブ運動の発展

キブツより小規模な共同村であるモシヤブでも、キブツの成功した例を考慮し、企業を興すことに努力していますが、個人的生活を基礎とする小さな村のモシヤブでは、大変む

入を増加させ、購買力を高め、労働に多様性を与えたことです。そして、若者達も都市へ出て行くことなく、村にとどまるようになり

ました。キブツは高い教育を身につけた人間を必要とします。従つて、キブツは、より多くの若者達を研究のため大学に送っています。勉強をしたい者すべてが、より高度な教育を受けられるようになっていきます。仕事もまた、興味あるものとなってきています。

二年前、アメリカの経済学者の一行が、イスラエルの企業調査に来たことがあります。なぜなら、イスラエルには私企業があり、公企業があり、キブツが経営する企業がある。このように、種類の違った組織があり、これらと比較し、研究するには都合がよかつたからです。アメリカの経済学者達は、明らかに労働を主体と考える社会主義者ではありません。彼らは、ただの経済学者にすぎず、彼らは資本主義体制を支持する人間です。その彼らが、キブツの産業組織の労働投資力から生み出される高い生産性と、輸出成長率に、大きな驚きを持ちました。

キブツ企業の能力は、私的企業の能力を上まわっています。このことが、私的資本、政治しました。それは、モシヤブ内ではなく、多くのモシヤブが存在している近くの発展した町アシドットに建設されました。ここに、モシヤブで栽培されている果物と、野菜の過程工場があつて、特に野菜部門はキブツをしのぐものがあります。モシヤブは、結合してこのすぐれた工場を作り、経営を続けています。この工場長は、ヤコブ・ドロンといつて、アジア・アフリカ研究所の講師の一人で、すべてのキブツ、モシヤブが共同して設立したイスラエルで最も大きな農産物の市場組織の「トウヌバー」に関する講義をしています。モシヤブの設立した工場の工場長となつたあとも、研究所で講義を続けていますし、彼自身も、モシヤブに住んでいる人ですが、一方では農業省の顧問でもあります。

モシヤブ運動は、このように成功した企業を、より多くおこそうと考えています。しかし、それがモシヤブ内か、モシヤブ外かが問題なのです。モシヤブ運動とキブツ運動の工業部門における地域共同開発は、イスラエルでは、特に最近の二年間に著しい発展をとげました。特にキブツにおける急速な経済発展には、目を見張るものがあります。

キブツにおける雇用労働の問題

次にキブツが工業化を進めるにあたってのいくつかの障害について、少し述べなければなりません。

それは、賃金労働の問題です。最近の三年間における工業の急速な発展が、賃金労働の増加を押し進めました。しかし、昨年は雇用労働者の数を減らすため、キブツは、キブツの若者を工場にふりむけ、またキブツ運動に参加している労働者などを吸収して、外部からの雇用労働者の増加をくい止めることができました。我々は、キブツ内やその工場で、賃金労働者を雇うことは、キブツ生活の原則

地域総合開発の必要性

次に、イスラエル社会全般における労働者の経営参加についてお話ししたいと思います。このことは、日本ではどうだか知りませんが

に矛盾すると考えています。

そこで、キブツ運動は、賃金労働を共同労働経済に環元するような、いくつかの次善策をとっています。その一つは、共同生活に加わる新しいメンバーに、分配に結びつく必要な資本を与え、管理の仕事を受けさせるなどの方法であります。キブツ運動における雇用労働者と共に、協同体を作るといふ考えは雇用労働者はその協同体の一部で、キブツはその協同体の他の一部であるという考え方で、キブツは、労働をそそいだ範囲内において、利益を得ています。

西独、英、仏、伊、ユーゴ、そしてイスラエルでも、大きな問題となっています。

私達は、労働者が、たとえそれが私営企業

であったとしても、経営に参加するのがいいと考えています。キブツとモシヤブでは、独自の労働経済をもっていますが、ヒスタドール傘下の労働銀行、建設会社、鉄鋼、ガラス、セメント工場などの公企業では、経営者は労働者によって選挙されるのではなく、ヒスタドルートの行政をとりしきる「ヘブラット・オブデーム」によって任命されることになっていました。

そこでは、労働者の条件は、私営企業よりも良いとはいっても、サラリーマンです。そこで、ヒスタドルートでは五年前、労働者がヒスタドルート傘下の企業の経営には参加することを決定し、それを私企業にも要請しました。しかし、私達は、このことに対して全くもって大きな障害にぶつかりました。

それは、経営者に労働者の経営参加を納得させるのではなく、労働者にそのことを呼びかけ悟すことでした。なぜならば、労働者達は、経営上の問題に関与することを好まなかったからです。もし、たった一人の労働者が監督として管理面に参加し、相応の給与を与えられても、それは有効ではありません。より多くの労働者が、ただ単に管理面においてではなく、その利潤を追求する場にも参加

すべきで、もしそうでないならば、経営参加が意味のないものになってしまいます。

このことを私達は認識して、多くの労働者の管理面における参加、株券保持、割増し金など、いろいろな形による経営への参加の意義を探することに努力しています。

最後に、地域総合開発について述べたいと思います。イスラエルに行ったことのある人は、ラヒッシュとシアラ・ネゲブとの地域における共同開発を思い出されることでしょう。



A. A. I. 東京セミナーで講演するアキバ・エガー

よく御存知ない方のために、基本的概念を申し上げますと、地域開発とは、農村地域への産業導入による発展、教育、娯楽、スポーツ青年活動、医療機関など、地域サービスの発展による総合開発を意味します。

ある程度発展している村を、更に発展させることは、たとえ村に工場があっても、能力に限界があつて不可能ですが、いくつかの共同体を組み入れた地域で開発を進めれば、大工場に発展させることも可能で、農業機械の使用、修繕、農作物を使つての加工産業、より良いより安価なサービスが期待でき、より高度な教育、医療機関、文化的娯楽のための施設の向上がはかれます。限られた村の組織内だけにおいては、経済的にも、社会的にも発展させて行くことはできません。都市から離れた地域の生活条件を考えると、この方式が、近代化に向つて行く最も効果的な方法だと確信しています。そして、このことは若者が都市へ流出するのを防ぎ、逆にまた、東京ばかりでなく、イスラエルでもそうですが、混乱、公害、騒音、犯罪、などの蔓延している都市に住んでいる人々を、農村地域に引きつけることにも役立つと思います。

なぜなら、この地域開発は、都市と農村の

長所を結びつけて、都市の長所を農村部にもつてくるよう計画されているからです。これは、イスラエル独自の体験から得た意義ある形態ですが、他の国々にとつても、これは重要な意味をもつと思いますし、現在、私たちはその体験を分かち合おうとしています。

地域共同開発運動の推進者の一人、ハイム・アルペリン教授による『アグリタス』を訳した富田教授によつて、小さな大変味な場所、この本の思想にそつた地域開発の考へに熱心な若者の小さなグループができ、アグリタス研究所と呼ばれています。その理念は、農工業を包含した地域共同開発にあり、私は、この小さな出発が大きな運動へと発展することを望んでいます。

日本における状況や、社会構造における違いがあるにしても、社会、経済の問題や、若者の問題を、この理念の普遍的な何かが解決するのではないかと思います。日本には、日本独自の問題がありますが、それらはイスラエルにおける私達の問題同様、解決に急を要する問題です。私は、イスラエルにおける我々の研究成果の成功と、日本アグリタス研究所が大きな収穫を得るであらう一つの種子であることを喜ばしく思っています。

キブツにおける 日常の諸問題

モシェ・ケレン

訳・永井恵三

基本的要求

広い意味での平等概念の適用において、欠陥が多少ない訳ではないが、キブツは他のどんな現代社会にも追従を許さない域に達している。つまり、優越した支配的地位によって経済的報酬を得るキブツメンバーは存在しない。究極的に、キブツは全メンバーに同等の住居や家具、レクリエーションの機会を分与する。また、子供の教育の均等、同等の食事衣服、完全医療管理、同等の経済的保証、創造的自己表現の機会を全メンバーに保証する。キブツ内の仕事内容とか、年功とか、以前に何をしていたとか、技能が優れているとかによらず、すべてのメンバーは、これら諸権利を充分活用する権利がある。しかしながら、毎日の生活で、基本的人間差とか、外的客観的差異とからくる些細な苛立や不平等感が、不思議と大きく見えてきて、巨大な建設的背景がばやけてしまふというのが、人間の人間たることである。これらのことを乗り越えられない人にとつて、キブツはいたって居心地が悪いところである。

理論的に、そのような些細な苛立や不平等感が消滅するような経済的發展段階がふたつあると考えられる。ひとつは、持つべき何物もないような全くの貧困状態であり、もうひとつは、何でも持てる完全に豊かな状態である。とはいっても、思慮あるキブツのメンバーならば、蓋然的に、それらの中間的發展段階こそが常態であることを知っている。というのは、完全な豊かさなどあり得ないからである。そこで、例えば、キブツに一〇〇部屋あつて、そのうち一五部屋にのみラジオが備わつていたとする。そして、キブツの人達が平等ということを考える余り、この一五台のラジオを倉庫入れしておき、残りの八五台が購入できるまで使わないで待つということはいくらなんでも馬鹿気していることも知っている。また、自分が持ってきたラジオには当然愛着を持つものであるし、それらのラジオを取り上げて他のメンバーに与えるということも、やりすぎであらう。キブツは、結局、できる限り速やかに必要最低限の生活水準を保証することが、このジレンマから逃れられる唯一の方法であることを知った。もし、近い将来、舶来の手の込んだものではないにしても、自分にも快適な安楽椅子が与えられるこ

とをすれば、外国から移民してくる同胞に対しても、安楽椅子を用意して、あたたかく迎えてやることに同意するだろう。たとえ、キブツ内に根を張った融通の利かない平等原則論があるにしても、それを超えて、あたたかく迎えることだろう。自分にも十日間の休暇に必要な最低限の資金が与えられることになれば、仲間の誰かがアメリカの両親と一緒に旅行に出かけるのを、喜んで承認することだろう。緊密な結合である協同社会が存在する為には、如何に生活するか、あるいは、如何に生活させるかの賢明な運営策が不可欠である。しかし、それは生産手段によって許されるあらゆる事情の上に成立する。そうでなければ破滅することにならう。

指導性

キブツを優れた社会集団にもつていくか否かは、キブツ自身のもつ指導性次第である。望むと望まざるとにかかわらずそうなのであつて、同時に悪い方へ変わっていく危険性もまたここにある。例えば、会計係にとつては、生産管理責任者や、キブツの村長や、労働調

整委員と、キブツ事務所のような固苦しいふうい気の中ではなしに、彼の居間で紅茶を飲みながら経済問題を議論するのは至って自然のことなのである。これらの人々と、将来その地位に座りそうな候補者、あるいは過去にその地位にあつた経験者は、この種の議論に関心をもっているようである。結局のところ、紅茶を飲みながらその場に参与することを好む人達なのである。会計係がテルアビブ滞在中に収集した経済や政治に関する情報に対して、特に関心をもっている人達なのである。紅茶を飲みながらこの議論の場における経済的進歩に関する彼等の見解は、最終的にキブツ全体の方向を左右することになる。このグループの人達は、他のキブツの同じような立場にある人々との接触を持っており、情報や全く他愛もないゴシップに、アカデミックな関心以上の関心をもっている。自分の部屋にお歴々が集まるようなこれらの人々は公式の仕事に完全に終らせるまで、仕事を手離すのを好まない。

それはいかような種類の人達なのである。ずば抜けた能力を発揮する人は、往々にして、実際にはキブツでカード配りをしていようような平凡なメンバーである。彼等は二年間、時にはそれ以上の期間をキブツ外で活動し、僅かな時間のみ安息が許されるような生活をしている。国家レベルでみると、これら指導層は多かれ少なかれ結合力をもつた社会のグループであつて、家の外では彼等の生活水準は、彼等の同僚よりも高水準である。

しかしながら、指導力に基づいた社会集団ができると、次第にそして自動的に、キブツの求めている平等原則を侵すことになるなどと考える必要は全くない。

動物農場(アニマル・ファーム)の不注意な読者がやつたのと同じ過失から、そういう考え方もでてくる。

ある人々は、他の普通の人々よりも、いっそう平等に深い関心を持ち、それを追求している。この事実を認識せずに平等主義社会を建設することは不可能である。これら平等に對して人一倍強い関心を持っている人達は、同志を尊重し、また、お互いに魅力を感じ合っている。そこで、当然これらの人達による一つの社会集団ができることは避け難い。実



関係調整労働

際に、このことは将来のより良き協同社会の視点から、むしろ望ましいことである。

批判の余地は、このグループの特定のキプツメンバーを優遇したり、物質的にも優先したりして、他の人になんの特権や諸権利を与えられない可能性がある。そしてこのグループの特典を子供に世襲させないことが重要になってくる。キプツ生活に於ては、これら指導層のグループに入っていることは、どちらかといえば損になる。キプツはまず第一に労働者社会であるといえる。そこでは、自分の職責に打ち込んだエネルギーが、その人の評価の最終基準となる。如何なる種類の仕事であるかが、仕事はすべて同等価値に考えられ、等

しく報いられる。キプツの労働調整係はキプツ内外での第一線の仕事を終えたメンバー、あるいは仕事から解放されて帰宅しているメンバーに対して、食堂の配給係の仕事を与えるのが普通である。この点は非常に強調されている。

キプツ社会の外で仕事をしていたときの生活水準がどうであっても、キプツに戻った時には、他のメンバーと同等の諸権利(住居、家具、休暇、サービスに關して)を持つことになる。しかし、キプツの与えた物よりも上等の安楽椅子を持ちかえるようなことがあるかも知れないが、余りに多くの物を持ちかえて、他のメンバーの気分を損ねる限界を越えてはならないことに気をつけている。

親がどうであろうと、その子供は他の子供と教育の機会においては同等であり、所属社会集団及びキプツ内でのその子供達の地位は、子供達自身の能力によって決められる。子供の評価は、その親に能力があろうが、無からうが、キプツに於ても他の社会と同じように親とは別の問題として考えられ、その子供の能力と性格と人格に基づいて評価されるのであって、決して親の七光りに基づくものではない。

キプツで重要な地位につくことの不利益には種々のことが挙げられる。まず、家庭や家族から遠ざかることになり、神経は緊張の連続で、心を痛めることも多いし、責任がある。決して得になる仕事ではない。キプツでの選挙には、辞退が続くことがよくある。ある候補者は、妻の病気を理由にして断わるし、ある人は、能力不足を告げて辞退する。候補者が、争ってキャンペーンを行うような選挙風景は、未だかつて見られない。キプツがこれらの椅子を満たす為には、なだめたり、すかしたり、種々の便宜を図ってやったり、時には強要したりして、そのために何ヶ月もかかってしまう例が珍しくない。

キプツのメンバー達にとって、経済に關する仕事の中心で、黙々としていっしょうけんめい働き、決して中途で止めてしまわないような人が、真の英雄なのである。そして、決して専門化させないように、毎年誰かに管理職をやらせることになるのだが、心の中では彼等の重責に同情を持っているのである。

個人におけるキプツ

キプツで重要な地位につくことの不利益には種々のことが挙げられる。まず、家庭や家族から遠ざかることになり、神経は緊張の連続で、心を痛めることも多いし、責任がある。決して得になる仕事ではない。キプツでの選挙には、辞退が続くことがよくある。ある候補者は、妻の病気を理由にして断わるし、ある人は、能力不足を告げて辞退する。候補者が、争ってキャンペーンを行うような選挙風景は、未だかつて見られない。キプツがこれらの椅子を満たす為には、なだめたり、すかしたり、種々の便宜を図ってやったり、時には強要したりして、そのために何ヶ月もかかってしまう例が珍しくない。

小さな町には、その町独自の性格があるがキプツも小さな町である。そこではお互いの名前を知らないというようなことは起こらない。ニューヨークのアパートで、隣人と親しい付き合いもしないで、何十年も生活しているようなこともあるが、キプツではそんな生き方はできない。すなわち、イデオロジックでいうところの『隣人のナベの中の料理』である。小さな社会では、どこでも同じでゴシップに花が咲き、窮屈な思いをしがちであり、狭量である。少人数のグループが作りがちな密着したあの温室のようなふんい気が充満する。すべての有名な人々は、時々匿名を使いたがる。また、他人に知られたくない面を持つているものなのだ。自分の生き方に自分の決心で行動したい時もあるし、どういう形であっても一人きりになりたい欲求が起ることもある。キプツの構造面のことばかりおき、多くのキプツでは、その規模と彼等の

狭量住居設備では、この問題はいつそう難しくなる。小さいキプツよりも、大きいキプツの方が当然匿名は得られ易い。このように大きな社会集団では、自分の仕事を終えて、余暇を一人きりで、あるいは家族、親友と共に過ごし、委員会にも関係せず、会合に出席も

しないで、大多数の他のメンバーとは、没交渉で過ごすことも可能である。こういう大きな社会集団の中でも、大勢のメンバー、訪問者、臨時労働者、訓練中の若者達と共に食堂で食事をするのがいやになり、社交に氣を使うことなく一人静かに食事をしたくなる時がある。小さなキプツでは、三五人のメンバーが、いつも同じで、ついには一緒に生活できなくなつて分解してしまうことがあった。

メンバーの個人的欲求が高まってきた結果、キプツ運動は、全般的に、メンバーの個人生活とその欲求を十分考慮するようになってきた。最近の分析では、キプツはそのメンバーにとつて個人的に良い生活方法であると確信されているかどうかによって成り立っている。だいいち、キプツ集団社会で生活しようとする心するよう人は、堅固な信念と洗練された感覚と、そして高度の教育を受けた強烈な個人主義者なのである。さもなければ、今まで暮らしてきた一般社会から飛び出して、キプツで暮らすなどとは考えもしないだろう。もし、そのような人がキプツ内に充分な部屋を得られず、個人的要求を満足させられないときには、キプツを去るか、さもなければ、キプツ内に留まり、高尚な議論に仕立て上げ

民権のキプツ

キプツは、道徳倫理を日常の行動規範として生きるような環境づくりに成功した。キプツ内での盗難事件が発生するようなことは全く稀で、一般的にもそのように報道されている。また誰かが人をなぐるというような事件も減多に起こらない。そういう事件は特別総

て運動を始める。これらの動きは、往々にして無視できない。私が、私のキプツで最も当惑したことは、個人的な事柄を大勢の人に対して説明しなければならぬことであった。それら大勢の人の中には、往々にして、私が全く接触したことのない人達がいたのである。キプツ総会でも、一番難しいのは、海外の親戚を訪れたいとか、家族内の問題を解決する為とか、大学で勉強するとかの理由で一定の期間キプツの外へ出たいという希望に対して許すべきか否かを決定するといった種類のものである。中には、自分の問題を大勢の裁量にまかせるよりも、いつそのことキプツ社会を去つてしまおうと考える人もいるのである。

会の議題にまでなりうるし、素朴なメンバーにとつては、当惑しつつも、興味しんしんたるべき事であるし、衣料の洗たく、繕い、購入などで働く婦人の中で、何年間も話の種になる程のセンチヨナルなでき事なのである。

キプツ社会は、メンバーに、彼らをとりにくすべての社会的安全と、経済的安定を与えることができた。この社会では、特定の人をひいきしたり、村八分にしたりして差別することはない。各メンバー間の関係は、非常に公平で思いやりがある。

キプツ運動は、この国においては道徳心及び社会の進歩と同義的な意味を持ってきたし、イスラエルの発展の為にその力を結集し、積極的に関与した。しかしながら、この生活形態は、人格を生かす為の私的自由を認めないで、型にはまった行動パターンを強制する危険をも持っている。その結果、何人かの人は、意識的にか、あるいは無意識的にか、拘束されているように感じ、この拘束に苛立ちを感じて自己批判的に、そして自閉的になりがちである。マツアウ・ルーアハ（意気消沈）という言葉はキプツ社会で非常によく使われる。キプツには、保守的な頑迷家から過

激な改革論者までいて、全くいろいろと違った意見があるが、そういう観点の違いがどうあろうとも、キプツメンバーのことを考えるということは、非常に関心を向けられている問題である。キプツ運動の原則論や構造論についての議論では、個人の自由とプライバシーを大幅に認める方向にある。キプツは先鋒的共同社会である。従つて、しっかりした共同社会を建設し、その発展を確保するといった当面の課題があつた為に、重点は快適な生活ということに置かれた。しかしながら、キプツのメンバー達は、雑多な国柄を持つた、雑多な人格からなる二〇世紀の人間であり、キプツ社会は先鋒としての究極の目的と、メンバーの個人的要求との間に、当面の妥協点を見い出さなければならぬし、どちらをも無視することはできない。しかし、キプツ理念の基本的性格を変えることなしに、そのことが達成され得るだろうか？ 多くのキプツメンバーはそれらができるかと信じている。この問題の認識こそが、すべてのメンバーが最小限自動的に有する諸権利を明確にするため、「権利の条項」を多くのキプツが実施しようとしている動機の背景なのである。即ち、自分だけの部屋、ラジオ、部屋の改造の

便宜、書籍、子供におもちゃを買つてやつたり、キャンデーを食べたいだけ食べる為の、また切符を注文しておかなくても、街のコンサートに随時出かけられる為の充分な小遣い、適当な休暇を取ること、美術、音楽、文学における表現の機会、勉学による自己練磨の機会（たとえそれが、キプツの要請するところではない種類の主題であつたとしても）、どうしてもという時には、自分の部屋で食事できること、また、衣服や家具の選択のよいつその可能性の拡大や、もっと家族の生活を深めるための便宜拡張へと導く主要な動機がやはりこの認識なのである。

殆んどこのキプツでは、私的問題を小委員会に委ねる努力がなされた。この小委員会はキプツ社会の尊敬すべき人々からなり、他の機関の決定を何の説明もなしに無視できる強力な権限を持っている。キプツが同意するだろうと思われる要求と、拒絶するであろうと思われる要求と、各メンバーがかなり正確に判断できるだけの多くの前例を既に残している。委員会のメンバー達は、また、当該メンバーやその動機を、公開の審議に付することなしに決定を下すことができるのである。